

【パネルディスカッション報告】

台湾研究この10年：台湾を対象とした人類学的发展過程

三尾 裕子

はじめに

第1節 日本植民地期についての関心

第2節 現代の社会問題への関心

おわりに

(要約)

本稿では、主に文化人類学的な側面から、台湾の「社会」だけではなく「文化」についての研究の中で、主に日本で発表されてきた1998年から最近10年の台湾研究と、今後の台湾研究について、考察した。最近10年の動きとしては、主に日本植民地期についての関心の高まり、及び、現代的問題への挑戦の2点に絞って論じた。また今後研究が望まれる研究課題として、都市研究、台湾人のトランスナショナリズムあるいはグローバル化研究、及び外国人労働力や花嫁など台湾へ入ってくる方向でのグローバル化についての研究の3点を取り上げて論じた。

はじめに

本稿では、「社会」をテーマに、主に文化人類学的な側面から、台湾の「社会」だけではなく「文化」（この場合「文化」とは、文学や芸術といった高文化というよりは、日常生活の中で実践されている慣習、象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系などを指す）についての研究の中で、主に日本で発表されてきた1998年から最近10年の台湾研究と、今後の台湾研究について、考えてみたい。

台湾に関してなされてきた人類学的な研究は、長らく、漢人研究と原住民研究の2分野に分かれていた。多くの人類学者は、台湾を一つの地域として研究を行ってきたというより、言語や生業、社会構造などといった人類学上の理論的な枠組みによって、研究対象を設定してきたため、このような分業が成り立ってきたといえるかもしれない¹。しかし、最近の台湾における政治の民主化は、台湾を一つの地域実体としてみて、人類学的な研究を行うという研究のスタイルを可能にしつつあるともいえるだろう。その意味では、人類学による「台湾研究」は、比較的新しい学問分野と言えるかもしれない。以下では、人類学的な手法、理論を用いた全ての研究に言及する余裕はないので、主に日本植民地期について、及び、現代的問題への関心の2点に絞って論じることとする。

第1節 日本植民地期についての関心

日本台湾学会創立の4年前の1994年に発足した「日本順益台湾原住民研究会（2001年1月より

2006年までは「台湾原住民研究会」、以下「原住民研究会」と略称)は、1996年より『台湾原住民研究』を発行している。同誌の10号(2006年)では、創刊10年をふりかえって、編集代表の笠原政治が、この時期の研究の特徴を、次のようにまとめている。

「戦前の台湾原住民(高砂族)研究に対する評価、埋もれていた古い資料の発掘と紹介、植民地状況の分析など、どの側面を取り上げるにしても、全体として研究者の間に台湾の日本統治期についての関心が高まってきた」(笠原、2006:223)

日本統治期への文化人類学からの注目は、原住民研究、漢人研究の区別なく、現在一つの主要な流れとなっている。この流れの背景には台湾における政治の民主化があることは間違いないだろう。即ち、「日本統治期」が、政治的なタブーや単一のイデオロギーの文脈から解放され、比較的価値中立的な立場から研究を行うことが可能になったのである。

文化人類学における日本統治期への関心は、実際には多岐にわたっているが、以下ではそれらを、(1)日本時代の研究資料の発掘と整理 (2)日本時代の研究に対する評価 (3)日本時代あるいは「日本」に対する台湾の人々の歴史認識、あるいは「日本」を媒介とした台湾における文化構築についての研究の三つに分けて取り上げてみたい。

1. 日本時代の研究資料の発掘と整理

最近10年の間に、台湾原住民研究の領域で、何種類かの日本時代の調査研究に関する新たな資料が発掘され、整理されて、世に送り出された。例えば、伊能嘉矩については、彼の原住民言語の調査ノートや写真を整理して出版したもの(伊能、1998, 1999)、台湾旧慣調査会の調査官だった小林保祥が採集して未発表のままであったパイワン族の伝説をまとめたもの(小林、1998)、瀬川孝吉の写真集(湯浅、2001)などである。

また、台北帝国大学の言語学教室で教鞭をとった小川尚義、浅井恵倫の残した膨大な一次資料については、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(以下、AA研と略称)において、「浅井恵倫・小川尚義未整理資料の分類・整理・研究」と題された大規模な共同研究プロジェクト(代表:土田滋元東京大学教授、2000年10月から2004年3月まで。以下、「浅井・小川プロジェクト」と略称)が生まれ、資料の整理、データベース化などが行われた。また、AA研と台湾の中央研究院語言学研究所(当時は、「籌備処」、以下語言所と略称)、及び浅井・小川の資料のうちの一部を所蔵する南山大学人類学研究所との間で、共同研究も立ち上げられ、特に語言所の李壬癸教授の尽力により、言語に関係する一次資料(フィールドノート、原稿、単語カード)の内容の鑑定と整理が行われ、彼らの残したフィールドノートの中に、これまで研究成果として発表されていない貴重なデータが大量に含まれていたことが判明した。特に、現在ではほとんど消失してしまった平埔族に関する言語のフィールドノートや音源は、貴重な研究素材である。また、写真や動画には、当時の日本の影響を受けつつあった台湾原住民の社会や文化が映し出されている。これらの資料は、整理、分析された後、目録が作られ、また若干の研究資料もあわせて、『小川尚義・浅井恵倫台湾資料研究』(2005)として出版された²。

このプロジェクトで、新たに発掘された小川・浅井の資料に基づく出版もいくつかなされてい

る。そのうち、AA 研から出版されたものとしては、李壬癸が整理、分析を行った小川によるフアボラン語の語彙集 (Li, 2003) や原住民言語の比較語彙集 (李・豊島編、2006) があり、そのほかにも台湾で出版されたものもある (李・土田、2001, 2002, 2006)。また、浅井の残した写真などをもとに、それが撮影された地点、被写体の遺族などを捜し求め、当時の社会を再構成する作業も行われている (例えば、清水、2006, 2007など)

このほか、新しい資料の発掘というわけではないが、これまであまり注目を浴びてこなかった在野の研究者の研究の再評価、紹介が行われている。例えば、森丑之助は、これまでごく一部の専門家以外には知られてこなかったが、笠原政治らによって、日本における文化人類学の先駆者として、再評価が行われている (笠原、2002)³。また、上記の「原住民研究会」は、森を含めた日本統治期の原住民研究に関わる研究成果を網羅的に紹介する『台湾原住民研究概覧』を出版した。このほか、異色な資料として、台湾中央研究院 (当時) の林美容は、領台初期に台湾に暮らし、総督府などで勤めた佐倉孫三が漢文で書いた日台比較民俗誌とも言える『台風雑記』を紹介している (林、2006)。

2. 日本時代の研究に対する評価

日本時代に主に日本人の学者や官僚などが行った調査やその記録が、台湾研究の貴重な資料として注目を浴びる一方、最近の人類学界では、植民地主義と人類学との関係性という問題をめぐって、批判や反省、再構築や革新の試みといった動きが生み出されている。

人類学者及びその営為と植民地主義との関連については、以下のような批判がなされてきた。即ち、植民地支配の拡大に寄り沿う様に被支配者の社会に入りこんで他者の表象に関わってきた多くの人類学者は、植民地支配がもつ権力性、またそのような支配権力を背にした人類学者の権力性に無自覚のまま、他者をそのような支配のもつ権力性や暴力性とは無縁の存在であるかのようにみて彼等の「伝統文化」を掬い上げてきた、と。あるいは、人類学者は彼等の文化を文明に導くために、積極的に他者の文化に介入するための科学的根拠を提供してきた、というのである。

このような批判は、主に欧米の帝国主義国家の人類学者がその支配下に入った植民地に調査に入り、民族誌を生産してきたことについての再検討を促してきたが、近年では、日本においても、日本帝国主義とその支配下の植民地との関係の中で生み出された人類学的な研究、また被支配者の表象をめぐる議論が盛んになっている。

日本の植民地主義と人類学の関係を課題とするさきがけとなったのは、おそらく中生勝美であろう。彼は1990年代前半から、日本の人類学を通史的に批判的再検討をしている (中生、1993, 2000, 2004, 中生 (編)、2000など)⁴。山路勝彦も、90年代から初頭から台湾原住民の植民地統治と人類学との関係について研究を着手しており、2000年代初頭かけて発表した諸論文をまとめて、大著を出版している (山路、2004)⁵。また、山路が田中雅一とともに編纂した全世界の植民地主義と人類学を対象とした論文集 (山路・田中 (編)、2002)、アジア・オセアニアの植民地主義と人類学の関係を対象としたもの (Bremen Jan van and A. Shimizu, 1999)、同地域について戦時期に絞って編まれた論文集 (Shimizu A. and Jan van Bremen, 2003) なども出されている。

これらの中で、例えば Tsu Yun-hui (祖運輝) は、台湾旧慣調査や『民俗台湾』の問題を取り上げています。

日本の戦前の人類的な研究については、人類学内部からだけではなく、その外からの批判的検討も盛んになされている。その批判の矢面に立ったものの一つが『民俗台湾』誌である。この雑誌に関わった戦前の人類学・民俗学者たちは、1990年代後半以降、主に人類学・民俗学以外の研究者から、良心を装いつつ(意図的に)植民地支配へ貢献したと批判されるようになった。他方、この雑誌の当事者たち及び現在の台湾の人々の中には、この雑誌が良心そのものであった、という評価を下すものが多く、評価の二極化現象が起っている。しかし、前者の批判から見えてくる問題性は、次の諸点であろう。まず、植民地権力に対して明確な立場表明を行った抵抗以外の言説を植民地主義的であると断罪することは、批判者とは違った体制下の社会通念に基づいた行動を、現在の分析者の社会が持つ一般的価値観で判断することであり、自らを安全な高みに置いたまま、「見る者」の権力性に無意識であるという点において、植民地主義と同じ誤謬を犯している、ということ。そして第二には、本当に問題とするべきは、戦前の人類学に植民地主義思想や優生主義思想があったかなかったかと言う点について「真実」の所在をつきとめることよりも、考察の対象となっている台湾の文化を生きてきた当時の人々及びそれを受けついで今日生きている人々にとって、当該研究が如何なる意味を持つものと受け止められているかという「認識」を明らかにしていくことであろう(三尾、2006)。

3. 「日本」に対する歴史認識についての研究

さて、植民地期の人類学を含む学術研究に対しては、もちろん、それらをア priori に価値自由で中立的な「資料」「成果」として無批判に利用するのではなく、これらを批判的に検討する姿勢が必要である。しかし、検討を行うべきは、過去の遺産が、台湾の人々によってどのような過去として記憶され、またそれが個体から個体へ、世代から世代へと伝達されて共同化されているのかを問うことであろう。当事者の認識を重視することは、人類学が「歴史」を扱う際の一つの重要な問題設定のあり方であるといえよう。更に一点付け加えるならば、「当事者の認識」を問う場合、明確な主張を書き、発話することのできる知識人の言説に回収しきれない多様な市井の人々の経験、談話などをくみ上げることによって、知識人によって獲得されるヘゲモニーを相対化し、当事者たちの社会文化の多様なリアリティの全体像を明らかにすることも人類学が求める研究のあり方であろう。

その意味で、今日それを抜きにして語るができない「日本植民統治」や「日本」に関する様々な事物について、今日の台湾の人々が、いかなるイメージや認識を持っているのかを問う研究が増えていることは、特筆すべき状況であると思われる。例えば、筆者が関わった2回の国際ワークショップの成果として発表された『アジア・アフリカ言語文化研究』71号誌上の特集(2006、当該特集掲載の論文の一部は先行して『台湾文献』55巻第3期(2005)に「在臺灣発現日本」特集として中文で掲載されている)及び書籍(五十嵐・三尾編、2006)では、たとえば日本語(上水流)、高等女学校教育(植野)、仏教(五十嵐、松金)、墳墓(角南)、青年団(宮崎)

などを通して「日本」が如何に現在の台湾の人々にイメージされたり、利用されたり、あるいは切断されているかが解き明かされている。また、「日本」が台湾の人々のエスニシティやナショナリズム形成において果たした（あるいは果たさなかった）役割についても考察されている（黄智慧、何義麟、蔡錦堂、堀江）⁶。また、原住民研究においては、例えば中村平（2006）が、日本統治期をめぐる経験や言説を、先住民と日本との間の新しい関係の生成という視点で分析している。

第2節 現代の社会問題への関心

文化人類学の研究をレビューして「現代の社会問題への関心」を取り立てて項目立てすることには、おそらく違和感もあるだろう。なぜなら、文化人類学は、長らく「歴史」は扱わず、フィールドワーカーが現場で目にしたものを素材に研究を行うものだと信じられてきたからだ。しかし、「民族誌的現在」というものが、実は、研究者の側が無意識のうちに内在化させた「無時間的現在」、あるいは「超歴史的現在」であって、眼前にある「現在」を直視してこなかったことも、つとに批判されてきたところである。即ち、文化人類学者は、往々にして、現地の社会の現場から学的思考を開始するといいつつ、実際には、現地社会に「伝統」を捜し、在りし日の「伝統社会」「伝統文化」を遡行的に再構成してしまいがちだったのである。むしろ、現在への眼差しが「意識」されるようになってきたのは、歴史への関心が強まってきた最近のことであるかもしれない。

台湾では、「伝統」への意識的な関心の背景には、さまざまな要因が関与していると思われる。国民国家の形成過程の中での国民の均質化、グローバリゼーションの進行の中での文化の世界大での均質化が進行した一方で、民主化の動きの中で多文化主義が称揚されたり、マイノリティが伝統文化や先住性といったことを押し立てることによって、国家の中での権利や利益を獲得（あるいは回復）する、という動きが見られる。失われつつある文化のある要素を意識的に抽出し、象徴とすることによって、「伝統文化の連続性」を構築していこうとする動きは、当然ながら政治にも連結している。現在、人類学者が現地に足を踏み入れれば、政治的な活動と無縁な「文化」を探すことのほうが難しいくらいである。

最近の若手の研究者の特徴は、こうした生々しい問題にもチャレンジしていることで、新しい研究の方向性を開拓しつつあると言っていいただろう。例えば、原住民が占めていたと伝承されている空間を地図化する運動や、土地に対する所有権観念及びその返還運動などについての研究（石垣、2006, 2007；宮岡、2007, 2008）がある。

こうした問題を扱う上で、かなり慎重な扱いを要するのは、これらが、上述したように容易に現在の台湾における政治運動と結びつくことである。しかし、政治運動に対しての日本の人類学者の立ち位置は、比較的冷静ということができるといえるだろう。最近の若手の研究者には、こうした問題にも挑みつつ、それらの考察を、政治情勢分析として行うのではなく、当事者の歴史や文化の脈絡の中に位置づけて、それらの連続面あるいは断絶面を明らかにしていこうとする志

向性も見えている。もちろん、それは、日本の研究者が、台湾の研究者に比べて、より「他者」であるということにも起因する。ネイティブの研究者であったり、マイノリティが身近に存在したりする場合、あるいは、自らの国家の存立が国際社会の微妙なバランスの中でかろうじて保たれている今日の台湾では、学問が政治から遠ざかることは許されにくい状況がある。また今日の台湾の研究者たちは、その学問的良心から、むしろ積極的に台湾におけるマイノリティの待遇改善、権利獲得や、台湾の国際社会における地位獲得などに、自らの学問を役立てようとしているといえるだろう。しかし、我々日本の研究者としては、台湾の研究者と全く同じ角度から研究を行うのではなく、より「他者」であることのメリットを生かすことで、一見遠回りでありながら、台湾の多文化社会の理解（及び、建設）に貢献しようのではないだろうか。即ち、人類学者は、研究対象とする現地の「常民」を描くことだけで民族誌を成り立たせるのではなく、政治・社会問題に関与する政治家、行政官、人類学者などの研究者、活動家をも含めた様々な立場のアクターの言説や行動をも相対化し、また現地社会をとりまく（いまや容易にグローバルな広がりをもつ）より広域の社会との関係性の中に、現地社会を位置づけていくことにより、現地社会の将来についても、多様な選択肢の可能性を提示しようであろうと思われる⁷。

おわりに

以上、本稿では、最近10年ほどの台湾をめぐる文化人類学的研究のうち、従来の研究とは様相を異にするテーマを扱ったもののごく一部を紹介した。これら以外にも、もちろん様々な研究がなされている。例えば、宗教については、民間信仰、道教、仏教、キリスト教、新興宗教などについて、従来どおりまんべんなく研究が行われているし、祖先祭祀や葬儀の研究なども、文化人類学、宗教学、社会史などで恒常的に扱われているトピックであるといえよう。これらについては、本稿では、残念ながら、紙幅の関係で割愛する。

そこで、ここでは本稿のまとめとして、私見ながら、筆者が、今後研究が進展することを期待する研究テーマについて指摘をしておきたい。まず研究課題の第一点目は、都市研究である。都市研究は、これまではむしろ社会学の研究分野に属するもので、文化人類学の守備範囲ではないと考えられてきたためか、台湾の都市についての文化人類学的な本格的モノグラフはまだ数少ない（代表的なものとして、上水流、2005）。しかし、1960年代より始まった台湾の都市化（その裏返しとしての地方の過疎化）は、台湾の社会構造を大きく変容させている。農山漁村を対象とした伝統的な人類学のフィールドワークを行うに当たっても、都市に移住あるいは出稼ぎした世帯との関係性を無視しては研究は成り立たない。また都市自体も、旧住民と新住民との間の関係性、断絶性、そこで生まれる新たな共同性、といった問題を考えていくことが必要だろう。また原住民についても、今日においては、都市に居住する原住民の数が増加しているため、このような現状を無視した研究はなりたたなくなりつつある。

第二点目は、台湾人のトランスナショナリズムあるいはグローバル化研究である。台湾の人々の中には、戦後、欧米へ移住、定着した人が多い。家族を様々な地域に分散移住させたり、意

識的ではなくとも、結果として分散移住してしまっているケースも多い。このような分散化や、生活拠点の複数化、人々のネットワーク化についての研究は、もっとなされてしかるべきであろう。

第三点目は、台湾へ入ってくる方向でのグローバル化である。特に、外国人の労働力や花嫁が台湾社会をどのように変容させているのか、といった点に注目したい（萌芽的な研究として、例えば横田、2005）。こうした研究テーマは、従来文化人類学が必ずしも得意とした分野ではない。しかし、今日では、空間的に固定され、境界付けられた実体としての社会を前提としたフィールドワークは成り立たなくなりつつある。フィールドの人々の生活経験に寄り添った民族誌記述を目指すのであれば、人や情報、モノなどの脱領土的で多中心的な流動状況を概念化し、記述する努力が求められよう。

注

- 1 もっとも、かつては原住民を主な研究の対象とする研究をおこなってきた他のディシプリン自体が殆ど存在しなかったことを考えれば、このような区分があること自体、異色といえるかもしれない。
- 2 報告書の完成と同時に、現物のノートや写真、浅井の遺品などが、AA研において2005年3月3日から30日及び4月15日から28日まで、国立民族学博物館でも2006年9月21日から12月12日まで公開された。また台湾でも九族文化村において、「浅井恵倫台湾部落踏査影像展」と題して、浅井撮影の写真が公開された（2005年7月から8月）。また、データベースも公開されている（2008年11月現在のホームページのアドレスは、以下の通り。<http://joao-roiz.jp/ASAI/> <http://joao-roiz.jp/OGV/>）。
- 3 森は、台湾でも注目され、楊南郡が伝記を出版しており、笠原、宮岡、宮崎が、和訳、解説などを行っている（楊南郡、2005）。
- 4 中生の関心の範囲は、戦前の日本の民族学の研究機関、研究者全体に広がっており、発表された論考では、台湾の他、中国東北地区、マカッサル、サハリンなども扱っている。
- 5 山路の仕事には、このほかにも、博覧会などにおける他民族表象における権力性についての批判的検討（山路、2008）や、明治以降の日本の学術調査のあり方についての省察（山路、2006）などもある。
- 6 ここで名前を挙げた研究者たちは、他にも、関連する研究を発表している。例えば、上水流（2007）、西村（2003a, 2003b, 2004）、宮崎（2001）、植野（2005）など。この他、戦前から戦後にかけての朝鮮と台湾における日本の存在について考察した論文集として、崔・原田2007があり、この中に何編か台湾関係の論文が見える。
- 7 日本の研究者が台湾の在地の研究者と異なる研究視角を持ち続けること、台湾の研究者の研究を市井の人々の思考と同じ地平で相対化して研究する態度とは、現在の在地研究者の数の増大といった観点から見ても肝要なことであると思われる。今日では、漢人、あるいは原住民自身で研究に携わる人が増えている。文化の表象が欧米や日本から来る他者の独占物である時代は終わっている。在地の研究者たちは、フィールドが直ぐそばにあり、言葉の障害も少ないなど多くのメリットを持っている。大学院の教授が院生たちを総動員して、大規模なローラー的な調査を行うことも多い。こういった研究と比べたとき、外からある一定期間のみ、しかも単独で入り、外国語としての中国語（あるいは方言、原住民言語など）を学びつつ研究を展開する外国人のハンディは大きなものとなっている。また、院生の留学先も欧米一辺倒であった時代から、日本への留学生の増加、あるいは台湾内部の大学院の博士課程における日本語を含めた外国語教育の普及などによって、かつては日本人の専売特許のように思われてきた日本語による史料解読の分野にも、台湾の若い世代が参入しつつある。こうした事態に直面したときに、我々日本の研究の独自性はどこにあるのか、といったことは今後真剣に考えていかなければならないだろう。

【参考文献】

- 浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究プロジェクト (三尾裕子・豊島正之編) (2005) 『小川尚義・浅井恵倫 台湾資料研究』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Bremen Jan van and A. Shimizu (eds.) (1999) *Anthropology and Colonialism in Asia and Oceania*, Richmond : Curzon Press.
- 崔吉城・原田環 (編) (2007) 『植民地の朝鮮と台湾－歴史・文化人類学的研究－』第一書房。
- 五十嵐真子・三尾裕子 (編) (2006) 『戦後台湾における<日本>植民地経験の連続・変貌・利用』風響社。
- 伊能嘉矩 (森口恒一編) (1998) 『伊能嘉矩 蕃語調査ノート』台北：南天書局。
- 伊能嘉矩 (日本順益台湾原住民研究会編) (1999) 『伊能嘉矩所蔵台湾原住民写真集』台北：順益台湾原住民博物館。
- 石垣直 (2006) 「<部落地図>作成運動－台湾・ブヌンの事例から」『台湾原住民研究－日本と台湾における回顧と展望』風響社、115-128頁。
- (2007) 「現代台湾の多文化主義と先住権の行方－<原住民族>による土地をめぐる権利回復運動の事例から」『日本台湾学会報』9、197-216頁。
- 笠原政治 (2002) 『文化人類学の先駆者・森丑之助の研究』平成12年度－13年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書。
- (2006) 「日本順益台湾原住民研究会・台湾原住民研究会の10余年」『台湾原住民研究』10、220-230頁。
- 上水流久彦 (2005) 『台湾漢民族のネットワーク構築の原理－台湾の都市人類学的研究』溪水社。
- (2007) 「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」『アジア社会文化研究』8、84-109頁。
- 小林保祥 (松澤貞子編) (1998) 『パイワン伝説集』台北：南天書局。
- Li, Paul (ed.) (2003) *Farvolang-English Vocabulary by Naoyoshi OGAWA*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa : Tokyo University of Foreign Studies.
- 李壬癸・豊島正之 (編) (2006) 『小川尚義 臺灣蕃語蒐録』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 李壬癸・土田滋 (編) (2001) 『巴宰語詞典』台北：中央研究院語言学研究所籌備処。
- (2002) 『巴宰族伝説歌謡集』台北：中央研究院語言学研究所籌備処。
- (2006) 『噶瑪蘭語詞典』台北：中央研究院語言学研究所。
- 林美容 (2006) 「宗主国の人間による植民地の風俗記録－佐倉孫三『臺風雜記』の検討」『アジア・アフリカ言語文化研究』71 (台湾における日本認識) 特集、169-179頁。
- 三尾裕子 (2006) 「植民地下の「グレーゾーン」における「異質化の語り」の可能性－『民俗台湾』を例に－」『アジア・アフリカ言語文化研究』71 (台湾における日本認識) 特集、181-203頁。
- 宮岡真央子 (2007) 「日常を生きる困難と伝統文化の語り－台湾原住民族ツォウの伝統的首長をめぐる<蜂蜜事件>の事例から」『社会人類学年報』33、151-170頁。
- (2008) 「先住性のリアリティをめぐる一考察－台湾の先住民族ツォウの土地権を事例に－」『七隈史学』9、77-95頁。
- 宮崎聖子 (2001) 「台湾における抗日運動の主体形成と<青年>概念－1920～24年を中心に」『現代台湾研究』21、104-123頁。
- 中村平 (2006) 「到来する暴力の記憶の分有 台湾先住民族タイヤルと日本における脱植民地化の民族誌記述」大阪大学大学院文学研究科博士論文。
- 中生勝美 (1993) 「植民主義と日本民族学」『中国：社会と文化』8、231-242頁。
- (2000) 「ドイツ比較法学派と台湾旧慣調査」、宮良孝弘・森謙二編『歴史と民族における結婚と家族－江守五夫先生古希記念論文集－』第一書房、373-400頁。
- (2004) 「人類学と植民地研究」『思想』957、92-107頁。
- 中生勝美 (編) (2000) 『植民地人類学の展望』風響社。
- 日本順益台湾原住民研究会 (編) (2001) 『台湾原住民研究概覧』風響社。
- 西村一之 (2003a) 「船長の力の形成－台湾カジキ突棒漁に見る知識の伝承－」『日本女子大学紀要 人間社会学部』13、45-57頁。
- (2003b) 「台湾社会における「日本」の存在に対する試論：日本語の位置づけ」『日本女子大学紀要 人間社会学部』14、21-34頁。
- (2004) 「台湾東部漁民社会における漁撈技術移転－カジキ突棒漁をめぐる日本人漁民の働き－」

『史境』48、36-54頁。

Shimizu, Akitoshi and Jan van Bremen (eds.) (2003) *Wartime Japanese Anthropology in Asia and the Pacific* : National Museum of Ethnology.

清水純（2006）「タイヴォワンの民俗に関する覚え書：浅井恵倫台湾映像資料の探求」『台湾原住民研究』10、149-170頁。

———（2007）「埔里盆地における最後の原住民：浅井恵倫・鳥居龍蔵台湾映像資料の探求」『台湾原住民研究』11、55-82頁。

植野弘子（2005）「植民地台湾の日常生活における「日本」に関する試論－女性とその教育をめぐる」『人文科学論集』43、1-17頁。

山路勝彦（2004）『台湾の植民地統治－＜無主の野蛮人＞という言説の展開－』日本図書センター。

———（2006）『近代日本の海外学術調査』山川出版社。

———（2008）『近代日本の植民地博覧会』風響社。

山路勝彦・田中雅一（編）（2002）『植民地主義と人類学』関西学院大学出版会。

湯浅浩史（2001）『台湾先住民写真誌：瀬川孝吉 ツォウ篇』東京農業大学出版会。

楊南郡（著）笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子（編訳）（2005）『幻の人類学者 森丑之助：台湾原住民の研究に捧げた生涯』風響社。

横田祥子（2005）「台湾・東南アジア系移民の今日と多文化主義の行方」『アジア遊学』81（特集 東アジアのグローバル化）、70-81頁。

